

第二十六回新人シナリオコンクール応募作品

# カスリコ

國吉卓爾

登場人物

岡田 吾一 (35)

荒木 五郎 (37)

酒井 博 (45)

中川 秀次 (23)

金田 光男 (34)

金田 安子 (65)

三島 保 (31)

中新町不動産の澤 (42)

コバケン (小林 健吉) (36)

クラブ藤のママ (36)

合力の政 (35)

五味大介 (28)

鈴木 清 (41)

岡田 幸江 (33)

岡田 佳代 (11)

紙芝居屋 (不詳)

寺田 源三 (69)

昭和四十年、土佐の高知。高知一の料理人・岡田吾一は「博打の中の博打」と言われる「手本引き賭博」にのめり込み破滅する。流行っていた店を手放し、妻の幸江と愛娘の佳代を幸江の故郷に帰した吾一は再起を期すが、高知一の料理人、という自尊心が邪魔をして、うまくいかない。住処も金もなく、空腹のため神社で気を失った吾一を救ったのは、高知のやくざ、高知港会の荒木五郎だった。普段、他人の世話など焼かない荒木だが、なぜか吾一に仕事を紹介する。その仕事とは、賭場で客の世話や、使いをして、わずかなご祝儀を恵んでもらう物乞いのような仕事だ。高知の賭場では古くから彼らはカスリコと呼ばれ蔑まれていた。何より博打で身を滅ぼした吾一にとっては辛い仕事であった。しかし、一日でも早く妻子を呼び戻したい一念、そして、もう他に行き場がないことを悟り、賭場に留まる。なかなかカスリ（ご祝儀）ももらえない吾一だったが、カスリコ仲間・中川秀次の

鼻屑客・コバケンの引き立てや商売人の才覚もあって少しずつカスリを増やしていく。カスリコの先輩・金田は、そんな吾一を苦々しく思っていた。そんなある日、博打の借金で追い詰められたコバケンが自殺する騒ぎが起こる。シヨツクを受けた吾一だが、そうした地獄を見ることこそ博打から本当に足を洗うために必要なのだという荒木の本心を知る。荒木は幼い頃、やはり腕のいい料理人だった父親を博打の借金のために亡くしていた。その父親の面影を吾一に見ていたのだった。三年の歳月が流れ、すっかり博打をやめた吾一だったが、その前にかつて激しい勝負をした伝説の老博打打ち・寺田源三が現れる。すっかり忘れた「手本引き」への思いを揺さぶられる吾一。そんなとき、荒木が組同士の喧嘩の始末で刑務所に入ることとなる。拘置所に面会に行った吾一に、すっかり博打心が抜けたと見た荒木は、再び店を始めるよう勧める。荒木の思いに応えたい吾一、店を開店する準

備を始めるが、金田の母親が重い病気であることを知り、開店準備に貯めていた金を入院費用として金田に渡してしまふ。開店は先延ばしかと思われたとき、荒木が手配していた金融業者が融資の話を吾一のもとへ持つてくる。喜ぶ吾一は金融業者の審査のため健康診断を受ける。しかし、その結果は、吾一の臍臓がんを無情にも知らせる。カスリコをやめ、残っていた蓄えと酒井の賤別を土産に妻子のもとへ向かおうとした吾一だが、源三への別れのために立ち寄った賭場で、再び手本引きの札を握ってしまう。大勝負の末、源三に負け、すべてを失った吾一はしかし、なぜかそんな自分を幸せ者だと感じていた。数カ月後、吾一の火葬に参列した源三は、手本引きで勝った金を借りた金だと偽り吾一の妻子に渡す。数年後、出所した荒木は吾一の墓を訪れる。一陣の風が礼を言うかのように荒木を吹き抜けていった。

## 神社の境内

「昭和四十年十二月 高知」のテロップ。

師走の厳しい風の吹きすさぶ神社の境内。その一隅のベンチで、コートも身に付けず震えている岡田吾一。

傍らにバッグがひとつ。

クウーと腹が鳴った吾一、目をつぶる。

と、その耳に子どもたちのおしゃべりや笑い声が聞こえる。

「？」と吾一が目を開けると、境内にはいつのまにか自転車の紙芝居屋とその前に陣取る子どもたちの姿が！

紙芝居屋、子どもたちを見渡し、おもむろに紙芝居を始める。

その題名は「ある男の転落」。

紙芝居屋「むかしむかし、土佐の高知に吾一という男がおった」

「えっ」と見る吾一。

紙芝居屋が表紙を引き抜く。

一枚目の絵は、板前姿の吾一が華麗な料

理を作っている姿。

紙芝居屋「吾一は腕のいい料理人じゃった。

吾一の店、魚一は、毎日客で溢れかえって大層繁盛したそうな」

二枚目は背広の吾一が手本引きをしている図。

吾一の元から羽の生えた札束が飛んでいく。

紙芝居屋「ところが吾一は手本引きという博打にのめりこんでしもうた。毎晩、何十万円、ときには何百万円ちゆうお金が消えていく」

子どもが「恐ろしい！」と合いの手を入れる。

紙芝居屋「ほんまに恐ろしいことぜよ」

三枚目は吾一が頭を抱える背後に、娘の佳代の手を引いて去っていく妻の幸江が描かれている。

紙芝居屋「ついに吾一は破産。店は借金のおかげに取られ、女房と子どもは田舎に帰って

しまいましたとき。ほんまに博打は恐ろしい！」

吾一「……わしのことやないか」

「それで吾一はどうしたか？」「吾一はどこへ行ったか？」と子どもたち。

紙芝居屋（ニヤツと笑って子どもたちを見回し）さあ、吾一の運命や如何に！」

吾一「ひとのことを馬鹿にしよつて！」と立ち上がる吾一。

が、その瞬間、紙芝居屋も子どもたちも、姿を消している。

「えつ？」となつた吾一、急に目の前が真っ暗になり、そのまま倒れる。

夕闇が迫る境内に、高知港会の幹部・荒木五郎と舎弟の三島保がやってくる。

三島「兄貴、歩きも寒うなつたですねえ」

荒木「そうやのう……あれ？」

荒木、倒れている吾一を見つけ、駆けよる。

荒木、吾一を抱き起こし、

荒木「おい！どうした！すっかりせえや！」

三島、横から吾一の顔を見て、

三島「兄貴、魚一の岡田さんやないですか！？」

荒木、改めて顔を見る、

荒木「……ほんまや、吾一ちゃんぜよ！」

気を失ったままの吾一。

### 松野医院・病室（夜）

小さな町医者診察室。

ベッドの吾一が目を覚ます。

その周りに年老いた医師・松野と荒木、三島。

松野「もう大丈夫やき。（荒木に）なんか精の

つくもんでも食わしちやりや」

荒木「先生、おおきに」

松野「泣く子も黙る港会の荒木が、喧嘩の怪

我やのうて、うちへ来たんは初めてやないか？ま、たまには人助けもええやろ」

と、病室を出て行く。

ポーツとしていた吾一、荒木を見て「！  
となり飛び起きる。」

吾一「ワ、ワシ……」

荒木「吾一ちゃん！たまげたぜよ」

訳が分からない様子の吾一

吾一「……」

### 焼肉屋・店内（夜）

テーブルの上の七輪で焼かれる肉から、  
モウモウと煙が上がっている。

三島が焼けた肉を吾一の皿に取ってやる。  
ただただ恐縮している吾一。

吾一の向かいに座ってタバコを吸って  
いる荒木、

荒木「吾一ちゃん、食べや」

吾一「はい」

荒木「ようけ、食うて精をつけんといかんぜ  
よ！先生も言うちよったろう！」

吾一、ペコリと頭を下げると、肉を口に

入れ噛みしめ、飲み込む。

三島が焼けた肉を次々に取ってやるそばから、どんどん口に放り込む吾一。

苦笑する荒木。

荒木「吾一ちゃん」

食べるのをやめて荒木を見る吾一。

荒木「店手放いってから、仕事はしてないろう？」

吾一「はい……わし、運転免許も持つちよらんですき、なかなか雇ってくれるところが、のうて」

荒木「けんど、板場やつたら、免許もいらんやろ」

吾一「……板場はちよつと」

荒木「ちよつと、なぜよ？」

吾一「別の仕事したい、思うちよります」

荒木「なんでや？」

吾一「……」

荒木「高知一の看板が、ほかのものの風下には立てん、いうことかよ？」

吾一を真つ直ぐに見る荒木。

「いいえ……」と俯く吾一。

荒木「おまんの料理はもう食えんかよ？」

吾一「……」

荒木、遠くを見るような目で吾一を見つめる。

吾一「(荒木の視線に)……?」

フツと我に返る荒木、

荒木「いや……女房と子どもはどうしちゆうぜよ？」

吾一「女房の田舎に帰しちよります」

荒木「迎えに行く気はあるんかね？」

吾一「はい」

と、荒木を見る。

荒木「……」

タバコを灰皿に押しつぶし、立ち上がる

荒木。

荒木「おまん、なんでもしてみてる覚悟はあるかよ？」

頷く吾一。

荒木「よし！ほんなら、わしが仕事を世話し  
ちやる！」

荒木を見上げる吾一。

### 九反田の賭場・表（夜）

遊郭の名残がある街の中を、三島が運転  
する荒木の車が来て、一軒の二階家の前  
で停まる。

運転席の三島が降りて、後部席のドアを  
開ける。

荒木が降り立ち、

荒木「吾一ちゃん、着いたぜよ」

やはり後部席から降り立った吾一、二階  
家を見て「！」となり、

吾一「ここは……」

荒木「知っちゅうろう？九反田の盆や」

吾一「（困惑して）……」

### 同・客間（夜）

一階の応接間のソファに座っている荒木。

その後ろに三島と硬い表情の吾一が立っている。

そこへ九反田の賭場の責任者・酒井博が入ってくる。

酒井、吾一を見て、フツと表情を変えながら、すぐ元に戻って、

酒井「こりゃ、荒木さん」

荒木「ぼんぼり（賭場の責任者）、暮れの休みにすまんのう」

酒井「なんちゃあ！」

荒木「正月はいつからやるがぜよ」

酒井「三が日明けてからやります」

荒木「賭場の客もさすがに正月は来んのう」と笑う荒木。

酒井「で、今日は？」

荒木「おまんに頼みがあつて来たがよ」

荒木、「こつちに座りや」と吾一を隣に座らせる。

荒木「知つちゆうろう？魚一の岡田吾一や」  
うなづく酒井。

荒木「盆ではええ張りっぷりで、名を売っちゃつたけんどのう」

酒井、吾一を見る。

吾一「……」

荒木「ぼんぼり、すまんけんど二、三年、この岡田を預かつてくれんかよ」

酒井、荒木を見る。

酒井「客として預かる、いうことですか？」

荒木、首を振り、

荒木「いや、カスリコ、やらしちやってや」

吾一「えっ」となるが表情を隠す。

酒井、困惑して、

酒井「カスリコに？」

と、吾一を見る。

俯いている吾一。

酒井「(荒木に)この人の顔と名前は、みんな知つちゆうですよ。客もこの人もお互いやりにくいかと違うでしょうか？」

荒木、酒井を真つ直ぐ見て、

荒木「それやき、おまんに頼みゆうがよ」

酒井「……………」

荒木「このとおりや」

頭を下げる荒木。

「！」と見る吾一と三島。

酒井「(驚いて) 荒木さん、頭上げてくださ  
い！」

荒木「(頭を下げたまま) 頼む、使っちゃって  
や」

酒井、困って三島を見るが、三島も肩を  
すくめるばかり。

酒井「……………」わかりました！わかりましたき！」

荒木、頭を上げ、ニコツと酒井に笑顔を  
見せる。

荒木「すまんのう、ぼんぼり」

そんな荒木に渋々頷く酒井、吾一に向き  
直り、

酒井「(吾一に) カスリコゆうたら物乞いと一  
緒ぞね。ようやるかね？」

事の成り行きに呆然としながらも、今さ  
ら引き返せないと覚った吾一、ただ頷く

しかない。

吾一「はい……」

荒木、吾一を見やり、

荒木「おまんが、盆（賭場）に落といた銭は  
盆で拾いや！」

吾一「（頷き）……」

荒木「酒井さんの言うことをよう聞いて三年、  
辛抱したら小さい店ばあ出せらあよ」

吾一「はい……」

### 高知市街を走る荒木の車（夜）

#### 同・車内（夜）

運転する三島がバックミラーで後部席の  
荒木を見る。

三島「兄貴」

ミラー越しに荒木も三島を見る。

三島「岡田さんと前に何かあったがですか？」

荒木「なんでや？」

三島「いえ、ずいぶん親身やなと……」

荒木「おかしいか？」

三島「いえ」

荒木「……ただのきまぐれよ」

窓外の夜の街を見やる荒木。

運転する三島の背に

荒木「すまん、すまん、腹、へったろう、柳町へ行きや」

九反田のアパート・中川秀次の部屋（夜）

ラジオを聴きながら手本引きの札を繰る練習をしている中川秀次。

「秀、おるがか？」と酒井の声がしてド

アが開く。「はい！」と

酒井を見て居住まいを正す秀次。

秀次「オヤジさん、こんな時間になんぞ用事でするうか」

酒井「用事やない。（後ろへ）入りや」

吾一が入ってくる。

酒井「岡田吾一や。うちでカスリコやるようになったきのう、今日からここで寝らすき」

頭を下げる吾一。

吾一「よろしゅうお願いします」

酒井「ほんなら、頼むで」

と出て行く酒井、ふと吾一を振り返り、

酒井「岡田、荒木さんの顔に泥塗ったらいかなぜよ」

と去る酒井。

吾一「(酒井を見送って)……」

部屋の隅に座る吾一をしげしげと見る秀次。

秀次「わし、中川秀次です。岡田吾一て、魚

一の岡田さんやる？」

吾一「はい」

秀次、手本引きの札を見せ、

秀次「これで負けて、借金のカタに店取られ

たつてほんまやったんやね！」

吾一「……」

秀次「けんど、ホンマにカスリコやるがですか？」

顔をしかめる吾一。

秀次「盆中（賭場）で小銭恵んでもらう惨めな商売やき！おつきな料理屋、やりよったひとがカスリコやいうて、びっくりぞね！」  
吾一「……疲れたき、もう横にならせてもらいます」

「あつ、ごめん。蒲団出すわ」と押入れを開ける秀次。

吾一、手伝いながら大きなため息をつく。

### 九反田の賭場・表

門柱に門松が飾られている。

テロツプ「昭和四十一年一月」

### 同・二階

白い布を抱えたカスリコの金田光男が吾一を見る。

金田「あんたが岡田さんかよ。オヤジさんから聞いたちゆうき。わし金田や」

吾一、頭を下げ、

吾一「よろしゅうお願いします。手伝います

き  
」

と、白い布に手を出そうとする。

金田「(鋭く)おいっ!」

固まる吾一。

金田「手は洗うちゅうかよ」

吾一「はい!」

金田「この真つ白な盆ごぎに手垢ひとつでもつけてみい、ボロボロになるまでしばかれるき!覚えちよきや!」

吾一、顔を強張らせて頷く。

金田、白い布を吾一に渡し、

金田「カスリコゆうたら人間の屑がやることぜよ。よう我慢するかよ?」

吾一「一生懸命やらせてもらいます」

冷ややかな目で吾一を見て、階段を下りていく金田。

吾一「(金田が去ったのを確かめて)人間の屑やと?おまえらと一緒にすなや!」

吾一、白い布を叩きつけようとしてやめる。

同・玄関（夜）

頑丈な鉄製の玄関扉の片隅に小さな覗き窓。

秀次、その覗き窓から外を確認して扉を開ける。

秀次「おめでとうございます！どうぞ上がってください！」

入って来た客が「おう！おめでとう！  
と言って二階に上がる。

その客の履物を階段の上がり口の下駄箱に整理する吾一。

秀次「吾一さん、今から常連さんがようけるき顔を覚えちよきよ」

吾一「（固い表情で）ハイ！」

玄関扉を叩く音。

秀次、覗き穴で確認して扉を開く。

二人連れの男が入って来る。

「おめでとうございます！」と挨拶する秀次と吾一。

客 A 「おめでとう！おっ新人かや！（吾一の顔を見て）どっかで見えたことがあるのう？」

客 B 「おまん、魚一やりよった岡田さんやろ！こんなところで何しゆうがぜよ！」

客 A 「ああそうよ！魚一の吾一さんやいか」

吾一 「（バツが悪そうに）今日からここで働かせてもろうてます。よろしゆうお願いします」

客 B 「そうか、店も、のうなっしてしもうたきのう」

客 A 「吾一さん、誰でも落ち目のときはあるき、気を落とさんと頑張りや。応援するきのう！」

吾一 「（深々と頭を下げ）ありがとうございますます」

「ささ、どうぞ」と、秀次が客 A、B を二階に案内する。

吾一、険しい表情で二人の履物を下駄箱に仕舞う。

同・二階（夜）

盆ござの周りに客 A、B を含めた張り子が十四、五人座っている。

その対面の真ん中に胴師が座り、両側に二人の合力、政と忠太を従えて手本引き賭博を開帳している。

張り子の札を擦る音が部屋中に響く。それぞれ、白い盆ござの上に札を並べる。

合力の政「さあ出来たかな？ よろしいか？」  
合力の忠太「エイな？ さあ勝負！」

胴師は前の目札の六を掴んで右端に置く。そしてカミシタに包んでいる親札の六を張り子に見せる。

合力の政「ハイ！ 六です。ない方は札を引いて」

抜けた（負けた）張り子の金を集める政と忠太。

それを見て胴師、受かった（勝った）張り子に金をつけるよう政に言う。

胴師「つけてみて……（受かった張り子に金

を渡す政と忠太。それを見て、悪いことしました。胴を洗います！」

「ようけ生きたのう！」と張り子の声。

政、手早くテラ銭を切り、残りの金を胴師に渡す。

「おおきに！」と言って座を立つ胴師。

合力の手伝いをしていた金田に「とつちよき！」と五千円を丸めて渡す。

「ありがとうございます！」と頭を下げる金田。

部屋の隅で、その光景を見つめる吾一に張り子の一人が「おい！新入り！腹が減ったき何か買ってきてや！」と注文する。

吾一「はい！何を買ってくるがですか？」

場を見守っていた酒井、横合いから、

酒井「秀と一緒に行きや（金田に）一階の秀と代われや！」

### 菜園場商店街・惣菜屋（夜）

吾一を乗せた秀次の自転車がやって来る。

小さな惣菜屋の前で止まり、

秀次「夜中はここぐらいいしか開いてないきね、  
覚えちよつてよ」

吾一「はい」

自転車から降りた秀次、陳列ケースを見ながら店主に注文する。

秀次「海苔巻きと卵巻き。おんちゃん、もう  
羊羹らあないかね？」

店主「今日はこれで終わり。なんちゃあ残つ  
ちやあせんぜよ」

秀次「そうかね、(吾一に)こればあやったら  
足らんき蓮池まで行こうか」

曖昧にうなづく吾一。

### 深夜の街

を走る、吾一を乗せた秀次の自転車。

### 蓮池の雑貨屋・表(夜)

買い物袋抱えて秀次と吾一が出てくる。

「おおきに、またきてや！」と上機嫌な

おばちゃんの声が聞こえる。

秀次と吾一、自転車に乗る。

吾一「秀さん。領収書はいらんがかね？」

秀次、苦笑して、

秀次「物乞いにもなれんカスリコに金をごまかす度胸はないき」

吾一「……」

### 九反田の賭場・玄関（夜）

玄関の番をしている金田、「ただいま」の  
秀次の声で扉を開ける。

買い物袋抱えた秀次と吾一が入ってくる。

金田「お疲れさん。（吾一に）おまん、ここに  
おりや」

吾一の袋を預かり、秀次と二階に上がる  
金田。

玄関に取り残される吾一。

### 同・二階（夜）

「皆さん！食べもんが来ましたき、どう

ぞ、声掛けてください！」と、金田。

「こっちへ持ってこい！」「こっちもや！」と口々に注文する客たち。

金田と秀次が食べ物配る。

機嫌の良い客から百円、二百円とカスリを貰う金田と秀次。

同・二階（深夜）

客も帰り、片付けをする秀次と吾一。

秀次、吾一に千円を差し出す。

秀次「吾一さん、これ取っちょいて」

「？」と見る吾一。

秀次「買い出しの役得やき。これが吾一さんの初のカスリや（とニツコリ）」

吾一「……おおきに！」

そこへ金田が来て、吾一の手から千円を取り上げる。

「！」の吾一と秀次。

金田「やめちよけや！」

秀次「カネさん、吾一さんも買出しに一緒に

行つちよつたき、かまんろうがね？」

金田「まだ一人で行けんに甘やかすな！」

秀次「……」

金田「(吾一に)カスリは自分の器量で稼がないかんぜよ」

冷たく言い放つて千円を秀次に放り、一階に降りていく金田。

吾一「……」

たばこ屋の公衆電話(日替り)

たばこ屋の軒先の赤電話で吾一が話している。

吾一「(受話器に)まあ、働く時間が一定せんけんど、その分、日当がエイキ辛抱せんといかんがよ。夜中に積み込みがあるときだけ、ちよつと、眠たいけんど(と笑う)……三年ばあしたら屋台ぐらいの店、出せるき、待ちよつてや」

土佐清水・足摺食堂・店内

数人の客が食事している田舎の寂れた食堂。

割烹着姿の岡田幸江が帳場の電話で話している。

幸江「(受話器に)あんだ、無理したらいかんよ。こつちのことは心配いらんきね」

元のたばこ屋の公衆電話

吾一「佳代は元気かね? …… そうね。うん、わかった。ほんなら、また電話するき」

受話器を置く吾一。

その肩に雨粒が落ちる。

吾一、空を見上げる。

雨が降り始める。

九反田の賭場・二階(夜)

張り子十人ほどで本引きが始まっている。胴は八百屋の留さん。

真ん中で張っているクラブ藤のママ、張り札を擦りながらため息をつく。

ママ「しょう、抜けるちヤ！ひとつも合わ  
ん！」

他の張り子たちも「いよいよ合わんのう」  
と愚痴りながら札を擦る。

ママ「ヤケてきた！酒井さん、タマ（金）、放  
つて！」

酒井、ママに十萬円の束二つを渡し、

酒井「えらい合わんねえ……ママ、留さんに  
惚れちゆうがやないかね？」

張子たちから笑いが起こる。

ママ「アホらしい！」

「さあ！出来たぜ、張ってちょうだい！」  
と合力の政。

階段下に声をかける酒井。

酒井「岡田、おるか？」

吾一、二階に上がって来る。

吾一「はい、何か？」

酒井、吾一に一萬円を差し出し、

酒井「食いもん買うてきいや」

吾一「はい！」

雨の街（夜）

降りしきる冷たい雨の中、合羽着た吾一が自転車で走る。

菜園場・総菜屋の表（夜）

総菜屋は閉まっている。

「クソツ」と、雨の中、再び自転車を走らせる吾一。

蓮池の雑貨屋・店内（夜）

合羽から水滴を滴らせた吾一、「！」となる。

吾一「こればあかね？」

吾一の前に菓子パン二個を差し出すおばちゃん。

おばちゃん「今日はなあんも残ってないき。

かんにんしてや」

吾一「おばちゃん、どこかに開いてる店はな  
いかのう」

おばちゃん、思案して、

おばちゃん「愛宕のタケノヤやったら……」

吾一「愛宕？もうちつと近くにはないがかね？」

### 愛宕へ向かう道（夜）

雨の中、合羽の吾一が必死に自転車を漕ぐ。

### 愛宕町・タケノヤ・表（夜）

合羽の吾一が、新聞紙で幾重にも包んだ海苔巻きや卵巻きといった食べ物の包みを抱えて出てくる。

急いで自転車に包みを乗せ、漕ぎ出す。

### 電車道（夜）

路面電車の道を雨に打たれながら自転車で走る吾一。

その横を車が抜き去る。

車が跳ね上げた水溜りの大きな飛沫が、

自転車の吾一を直撃する。  
バランスを崩し、転ぶ吾一。

新聞紙の包みが投げ出されて地面で破れ、  
中の海苔巻きや卵巻きなどが道にぶち撒  
かれる。

吾一、立ち上がり、呆然と散らばった食  
べ物を見やる。

吾一「……！」

自転車を蹴飛ばす吾一。

吾一「なんでこんな目に遭わないかな！  
ワシヤ、魚一の岡田吾一やぞ！」

なんで、こんな！こんな……！」

吾一、雨の中、座り込む。

吾一「……」

のろのろと、散らばった海苔巻きや卵巻  
きを拾い集めると自転車を起こし、九反  
田へ向かい、押して歩き出す吾一。  
雨が上がる。

九反田の賭場（日替わり）

庭の梅の木のつぼみが色づいている。  
「昭和四十一年三月」のテロップ。

同・一階

二階から怒鳴り声や大きな物音が聞こえる。

知らん顔をするか、二階へ行くか、迷っている吾一、二階を見て、

吾一「（自分に言い聞かせるように）関わったらいかん」

同・二階

秀次が合力の政に殴られて吹っ飛ぶ。

合力の政「誰にも言いゆうがな！百年早いわ！」

秀次「けんど……」

合力の政「まだ言うかや！」

政、秀次の腹を蹴り上げる。

蹲る秀次。

さらに蹴ろうとする政を、必死に羽交い

絞めにする吾一。

合力の政「こらっ、放さんかいつ！」

吾一「政さん！これ以上やったら怪我じゃ済まんなるき！」

政、荒い息を整えながら、

合力の政「……わかつたき、もう放せや」

吾一、政を放すが、腰を抜かしてその場  
にへたり込む。

合力の政「(秀次を見下ろして)ええか秀、カ  
スリコ風情が胴師気取りで合力の仕事にケ  
チつけるき、こうなるんじゃ！」

おんしやは胴師にはなれん！

アホな夢見るんはやめちよけや！」

言い捨てて一階に下りていく政。

吾一、秀次のもとに這つていき、

吾一「秀さん、大丈夫かね？」

腹を押さええながら起き上がる秀次。

秀次「なんちゃあない」

吾一「政さんに何言うたが？」

秀次「ゆんべ、コバケンさんがブチツた(負

けた）がは、政さんらあの間合いが悪かったきいうてゆうちやったがよね」

吾一「そんな喧嘩売るようなこと、言うたらいかんわ」

秀次「ほんまのことやき。コバケンさんも愚痴つちよつたき」

吾一「……？」

秀次「わし、コバケンさんとは、よう博打の話させてもらうがよ」

吾一「そう言うたら、コバケンさんが胸を張るときは、いっつも秀さんが呼ばれるのう」

秀次「今度、吾一さんも呼んでもらえるようコバケンさんに頼んじよいちやるきね！」

吾一「そらいかん。大事なご鬘履やろ」

秀次「えいき。……自分、近いうちに旅に出て、胴師の修行しよう思うちよるんよ」

吾一「……」

秀次「カスリコなんぞやつちよれん！」

吾一「そんなに胴師になりたいがかね？」

秀次「たつたひとつの夢やき」

力んだせいか、おならがプツと出る秀次。  
吾一「カみ過ぎぞね」

笑う吾一と秀次、傷が痛んで秀次は泣き  
笑い。

同・玄關（日替り・夜）  
顔に痣が残る秀次が番をしている。

同・二階（夜）

合力の政が張り子に声をかける。  
合力の政「さあ、どうかな？張ってください！  
さあどんなこと？」

張り子が思い思いに札を張る。  
合力の忠太「さあ、よろしいか？よろしい  
な！」

客C「ちよつと、まってや！」  
合力の政「合してよ、さあ、手をきって！よ  
ろしいな？ハイ、勝負！」

胴の客、測上がカミシタを開く。  
合力の政「はい、コモドリの三！」

右から二番目の目札を右端に置く測上。  
張り子たちから、ため息が漏れる。

合力の忠太「はい、三で受けてください！  
ない方は札を引いてください！」

抜けた張り子の金を素早く集める合力の  
政と忠太。

合力の横に座っている金田も手伝う。

合力の政「(胴の測上を見て)さあ、直して入  
ろう！」

胴の測上は一から六までの小さな札を三  
から一に直す。

肩に掛かった浴衣の中で、同じリズムで  
思いの数字の札を繰り、カミシタに入れ  
て前に置く測上。

その仕草、動作を張り子は逃さず見てい  
る。

測上はまっすぐ顔を上げて身動きせず、  
能面のような無表情で正面を見て座つて  
いる。

それを見て政と忠太が先ほどの勝負で受

かつた張り子に金を渡す。

客D「(金を受け取りながら)ええ綱(札)引くのうち!カツパ(総取り)やないかえ?」

張り子たちは測上の表情を舐めるように見て、出す数字を勘ぐる。

合力の政「さあ、よろしいか?よろしいな?出来たら手をきつて!」

客の手が張り札から一斉に離れる。

合力の政「さあ、よろしいな、はい、出来た、勝負!」

測上の手が前の並んだ目札に触らず、静かにカミシタを開ける。

合力の政「はい、三のネ!」

合力の忠太「はい、三のネ、三で受けてください!ない人は札を引いてください!」

測上、抜けた張り子の金をちらっと見る。

測上「悪いことしました!洗わせてもらいます」

測上が前の六枚の目札を二段に重ね、張り子たちに頭を下げる。

客E「(不満そうに)なんなら! 測っちゃん、もう上がるがかよ?」

合力の政「すんませんなあ」

政と忠太が金のつけ引きを手早くして、浮いた金からテラ銭を切り、合力二人分の金も引く。

残りの金を測上が持って席を立つ。

測上「取っちよきや!」

合力の横で手伝いしていた金田に千円札三枚を渡す。

金田「測上さん、おおきに!」

吾一が盆中を片付ける。

酒井「次は誰がいくぞね?(と盆中の客に問う)」

胴の前で張っていたコバケンが立ち上がり、

コバケン「ほんなら、回らしてもらおうきね」

胴師の場に座り、ポケットから十萬円の束を二つ、無造作に取り出すコバケン。

合力の政「コバケンさん、二十萬前(胴の金)」

でいくがかね？」

コバケン「そう。乗りもあるやつたら聞いてや」

合力の政「はい！乗りの方おりますか？どうですか？」

客C「一つ（二万）乗せちよいて！」

客D「ワシも一つ（二万）頼むぜよ！」

合力の政「他にありませんか？ありませんね？」

合力の忠太「コバケンさん、乗りは二つ（四万）、かまんかね？」

コバケン「（苦笑いしながら）みんなあワシがブチること、よう、知つちゆう！」

盆中に笑い声が起こる。

コバケン、客にお茶を配っている吾一に声をかける。

コバケン「おまん、こつちきて座りや」  
吾一「はい！」

金田「えっ」となるが、合力の横の座を空ける。

吾一、金田と入れ替わって政の横に座る。  
政と忠太が二十万の金をバランスよく配  
つて盆ござに置く。

合力の政「ほんなら、いこうか！（コバケンの握っている札を眺め）ピン（ー）に直してさあ入ろう！」

コバケン、肩から掛けている浴衣の後ろで札を繰り、カミシタに入れて自分の前に置く。

合力の政「さあ、入りました。どうですか？張ってください！」

合力の忠太「さあ、どんなこと？手早よう、たのんます！」

吾一「どうですかね？よろしくお願いします！」

慣れない言葉で照れながらも張り子に催促する吾一。

合力の政「さあ、よろしいか？手を合しちやってください」

合力の忠太「よろしいか？サイヤン！みんな

出来ちゆうき、合わしちやつてよ！」

張り子のサイヤン、コバケンの表情を舐めるように見て、

サイヤン「まあ、待ちや！初綱にコバケンは三をよう引くきねや！」

合力の政「さあ出来ました。サイヤン、おまんだけや！張るがかえ？」

サイヤン「そんなに言うがやったらいきや、ワシや張らんき！」

むくれたサイヤン、張る用意をしていた札を引つ込める。

合力の政「ほんなら、いこか！勝負！」

コバケン、カミシタを静かに開ける。

合力A「はい、初綱六！六で受けてください。

ない人は札をひいてください！」

受かった張り子は満足そうに頷き、外れた張り子はため息をつきながら張り札を引く。

政と忠太、素速く外れた金を集め、コバケンに声をかける。

合力の政「さあ、ピンに直して入ろう！」

コバケン、一に直した親札を張り子に見せる。

浴衣の中に手を入れ、最初と同じリズムで札を繰り前に置く。

政と忠太、先ほどの勝負で受かった張り子に、手早く、鮮やかな手つきで清算する。

吾一も合力の手が届かない張り子に金を渡す。

合力の政「さあ、張ってよ！どんな事？」

合力の忠太「さあ、早いところ出来てるよ！張ってやってください。どんな事？」

吾一「さあ、お願いします！お願いします！」

張り子たちがコバケンの様子を探りながら思い思いの札を張る。

合力の政「さあ、どないですか？出来たかな？出来たら手を切って！」

合力の忠太「みんな、合しちやってくださいよ！」

吾一「みなさん、合しちゃってください！」

合力の政「さあ、出来た、手を切つてちょう

だい！」

合力の忠太「よろしいな！はい、勝負！」

コバケン、前の六枚の目札を並べ換え、

最初の六の目札を右端におく。

次に左端の二を掴んで右端に置く。

そして静かにカミシタを開ける。

合力の政「はい、捲りの二！二で受けてちょ

うだい。ない方は札を引いて！」

「カッパやないか！」と盆中にどよめき

の声。

受かった者はほとんどいない。

コバケン「つけちゃつて！上がらしてもらおう

き！」

合力の政「（張り子たちに）すみませんなあ、

胴を上がらしてもらいます！」

張り子の多くが「なんな！早や、洗うが

かえ！？」と文句の聲が上がる。

政と忠太、素早く清算する。

コバケン「たまには勝たいてや。けんど、た  
った二つ引いただけで、よう生きたぜよ」  
サイヤン「二つやき生きたがよ！あと引いた  
らいつもの通りぜよ！」

盆中に笑いが起こる。

コバケン「何とでも言いや。(張り子たちに)  
悪いことしました」

と、席を立ったコバケン、吾一の肩を叩  
く。

コバケン「分かれや。取っちよき」

吾一に三千元渡す。

吾一「コバケンさん、おおきに！ありがとう  
ございます！」

と、丁寧に頭を下げる吾一。

次の胴のサイヤンが吾一に声をかける。

サイヤン「おまん、座っちよいてや！ゲンが  
ええきのう」

吾一「ハイ！」

部屋の隅で金田がその光景を見ている。

金田「……」

同・表（日替り）

秀次が玄関先を箒で掃いている。

玄関から金田が出てきて、

金田「秀、岡田はどこや？」

秀次「吾一ちゃんなら菜園場ですわ」

金田「こんな時間になにしゆう？」

秀次「今夜の分の予約やと」

金田「予約？」

菜園場・惣菜屋

吾一が店主のおんちゃんに予約注文をしている。

吾一「今晚はあんまり冷えんゆうき、お客さんもようけ来るはずや。ちよつと多めに

頼もつかね。それと、羊羹も！」

おんちゃん「わかった！ちゃんと用意しちよ  
くき！吾一ちゃんは先に注文してくれるき、  
助かるわ！」

にっこりと笑う吾一。

吾一「仕入れは得意やき（と苦笑い）」

### 九反田の賭場・応接間

酒井の前に荒木と三島が座っている。

荒木「一週間ほどでええやる」

酒井「ほんなら、来週一週間、閉めますわ」  
頷く荒木。

酒井「けんど、この時期に手入れやいうて、  
チクリでもあつたがやるかねえ？」

と、三島の顔を見る。

三島「まあ、そんなとこや思います」

荒木、酒井を見て、

荒木「ところで、吾一ちゃんは、どうしゆう  
ぜよ？」

酒井「はい、初めはどうかと思いましたがけん  
ど、今はなかなか、やりゆうです」

荒木「ほう、やりゆうかね」

酒井「商売人の才覚、ですね」

目を細める荒木。

同・玄関前

金田が秀次に詰め寄る。

金田「秀、おんしゃあ、岡田のこと、コバケンさんに頼んだやろ」

秀次「別に頼んじよらんがね」

金田「ええか秀、岡田のカスリが増えるゆうことは、ワシらのカスリが減るゆうことぜよ！わかつちゆうがか！」

秀次「……」

金田「よう考えや！」

と、玄関の中に消える。

秀次「カネ、カネ、カネかや！」

同・二階（夜）

吾一が張り子に食べ物配っている。

藤のママには羊羹を差し出す吾一。

藤のママ「あら、気が利いちゆうね」

吾一「ママさん、甘いもん好いちゆうき」

藤のママ「よう覚えちゆう！嬉しい！」

吾一に五百円札を渡す藤のママ。

吾一「こんなに……」

藤のママ「ええき、取っちよいて！」

吾一「おおきに！」

胴に座った留さんが吾一に声をかける。

留さん「吾一ちゃん、こっちに座りや」

「ハイ！」と合力の政の隣に座る吾一。

そんな吾一をギラツと見ている金田。

金田「……！」

### 金田の家・表（日替り）

ボロボロの一軒家に「金田」という蒲鉾板の表札。

### 同・室内

金田の母・安子が蒲団で寝ている。

薬の数を調べている金田。

金田「余っちゆう。（安子に）オモニ、きちんと薬飲まないかんやろ」

安子「大丈夫やき。具合の悪いときだけ飲んだらええ」

金田「そんなこと言いよつたら、いつまでたつても治らんが！」

安子、微笑んで、

安子「もう、ええきに」

金田 金のことなら心配しなや！薬代ぐらい、なんぼでも稼いじやるき！腹いっぱいになるぐらい薬飲みや！」

背中向ける安子。

金田「……」

安子、金田に背を向け、そっと涙を拭っている。

### 喫茶店・表

吾一が来て、入っていく。

### 同・店内

コバケンが吾一に手を上げる。

コバケン「吾一ちゃん、こつちや」

吾一、来て「？」と見る。

コバケンの隣にリーゼントの若い男が座

っている。

コバケン「ま、座りや」

吾一「はい……」

座った吾一に、若い男を紹介するコバケン。

コバケン「この人、十一（といち）の人やき」

若い男「人聞きの悪いこと言いなや。うちは

十日で一割も利息取らんぞね」

コバケン「ま、どっちみち金貸しやき」

若い男「（吾一に）ローン業者やきね」

コバケン「五味さんや。そこら辺に落ちちゆ

うゴミやないで（と笑う）。五つの味で五味

やき」

若い男・五味、不機嫌に、

五味「そんな、ややこしい紹介、せんとして。

五味大介です」

吾一「岡田です……」

と、ペコリと頭下げる吾一。

コバケン「いや、ワシ、ちつくとお金借りた  
い思うてよ、この人に頼んだがやけんど、

ワシの名前やったら貸せん言うてのう」

吾一「何でです？」

五味「コバケンさんは、これ以上貸せんぐらい借りちゆうきね」

吾一「はあ」

コバケン「そんでよ、吾一ちゃん、ちつく

おまんの名前、貸してくれんかえ？」

「えっ」となる吾一。

吾一「いくら借りるがです？」

五味「五十万」

吾一「……」

コバケン「頼むわ、吾一ちゃん。すぐ返すき」

吾一「けんど、今の自分に五十万返すんは無  
理やき……」

コバケン「心配しなや。今日の盆で受かっ  
てスツと返すき。のッ！」

吾一「……」

吾一をジツと見た五味、

五味「無理やね！」

五味、スツと立って店を出ていく。

コバケン「お、おいッ、待ってや！」

慌てて後を追うコバケン、吾一に、

コバケン「ええき、気にしなよ！」

と、行ってしまふ。

吾一「(見送って)……」

### 九反田のアパート・吾一と秀次の部屋

吾一の話聞いた秀次、

秀次「コバケンさんにも困ったもんやねえ」

吾一「秀さんも名前貸せ、言われたことあるがかね？」

秀次「(笑って)なんべんも」

言って立ち上がる秀次。

秀次「ほんま、気にせんでええき」

頷く吾一。

秀次「ほんならワシ、パチンコに行ってくるき。盆が休みやと暇でたまらん」

と、秀次、部屋を出ていく。

吾一、秀次の靴音が去つたのを確かめると、押し入れから自分のバッグを出し、

その中を探る。

吾一「……………」

靴下を取り出した吾一、逆さに振ると、  
百円、五百円、千円と、さまざまなお札  
やバラ銭が畳の上に散らばる。

x

x

x

岡田幸江様、佳代様と表書きされた封筒  
に、手紙とお金を入れる吾一。

吾一「(微笑んで)……………」

### 郵便局・表

吾一がお金の入った封筒を手にとって来  
る。

郵便局に入ろうとして立ち止まる。

吾一「……………」

そのまま郵便局には入らず、もと来た道  
を引き返していく吾一。

### 競輪場

ジャンが鳴り、加速した競輪選手たちが

バンクを駆ける。

### 同・車券売場

車券を買うため穴場の行列に並んでいる  
吾一、封筒の封を切り、取り出した金を  
握り締める。

吾一 「……………」

### 鏡川沿いの道（夕暮れ）

競輪帰りの男たちがとぼとぼ歩いている。  
その中に肩を落として歩く吾一の姿もある。

吾一、封筒を握りつぶし、川原に放り捨  
てる。

### 九段田の賭場・二階（日替わり）

テロップ「昭和四十一年六月」。

窓の外で、雨がしとしと降っている。  
盆の支度をしている吾一、ドタドタと階  
段駆け上がる音に目をやる。

青い顔で駆け上がった秀次、

秀次「ご、吾一さん、大ごとや！」

秀次が差し出した新聞を見る吾一、読んでギョツとなる。

×

×

×

「高知港で入水自殺か」の新聞記事。

「六月十一日朝、高知港の沖合い百メートルの浦戸湾に男性が浮かんでいるのを漁協関係者が見つけた、警察に通報した。男性は潮江町三丁目の無職、小林健吉さん(36)です。すでに死亡していた。警察は事故か自殺と見て調べている」

×

×

×

吾一「(も、血の気が引いて)……」

秀次「コバケンさんや。間違いない」

頷く吾一。

と、一階から「岡田！」と金田の声。

ビクツとなる吾一と秀次。

金田の声「港会の三島さんや！」

同・玄関

玄関に立っている三島。

吾一が来て、頭を下げ、

吾一「何か？」

三島「岡田さん、荒木の兄貴が呼びゆうき

一緒に来てください」

吾一「……」

高知港・岸壁

雨の中、三島の運転する車が来て停まり、

吾一と三島が降り立つ。

傘をさして岸壁に佇む荒木、手招きをす  
る。

三島に促され、吾一だけが荒木のもとへ  
歩み寄る。

荒木の傍らに立つ吾一。

荒木「(沖合を指さして)あのあたりに浮かん  
じよつたらしいの、コバケンは」

ハツとなる吾一。

荒木「博打の借金で死ぬるがは、ようあるこ

とやきのう。……ワシの親父もそうやった」

吾一、「えっ」と荒木を見る。

荒木「ワシがガキの頃、桜の木で首吊つてのう」

吾一「……」

海を見る荒木。

荒木「おまんは、そう、ならんぜよ」

吾一「……」

荒木「好きなことやつて死ぬるんはええけど、残されたもんは地獄じゃき！」

吾一「……」

荒木「カスリコやりよつたら、そんな地獄は嫌でも見らあよ……よう見ちよきや！」

ハツとなる吾一。

吾一「荒木さん！自分をカスリコにしたがは地獄見さいて……博打ようせんように！」

荒木、笑つて、首を振り

荒木「わしゃそれほど頭はまわらんぜよ」

吾一、荒木に頭を下げ、

吾一「ワシ、カスリコの仕事、一生懸命やら

せてもらいますき！」

頷く荒木、また海を見やる。

荒木「しんどいろうけんど、我慢することぜよ」

吾一「……けんど荒木さん、なんでワシなんか……」

荒木「……（ポツンと）首吊った親父、腕のええ料理人やつたらしいわ」

吾一、荒木の横顔を見つめる。

雨の岸壁に佇む荒木と吾一。

### 九反田の賭場・表（夜）

テロップ「昭和四十三年十一月」

月明かりの中、一人の老人がやって来る。

### 同・玄関（夜）

秀次が玄関の扉を開け、老人を迎える。

老人「ちつくと遊ばいてや」

秀次「どなたかお知り合いでもおられますか？」

下足番をしていた吾一、秀次を止め、

吾一「お越しです。どうぞ二階のほうへ」

言われて吾一を見た老人「あつ」となり、

老人「おまん、吾一ちゃんやろう？ワシや、

源三よ！冴えん胴師の源三よ、よ！」

吾一、老人・寺田源三に頭を下げ、

吾一「お久しぶりです。どうぞ、二階へ上が  
ってください。胴が（博打）立って（やっ  
て）ますき」

源三、吾一を見つめ、

源三「噂には聞いたちよつたけんど、苦勞しゆ  
うようやのう」

吾一「（笑顔で）いいえ、皆さんに良うしても  
ろうちよりますき」

源三「そうかえ、そらあ良かった。ほんなら  
上がらしてもらうきね」

源三、二階に上がっていく。

「こらあ、御大！お珍しいですね。相変  
わらずお元気そうで」という酒井の声  
が二階から聞こえる。

秀次「(吾一に)あのじいさん、誰？」

吾一「あの人が寺田源三さんぞね」

秀次「えッ！あのじいさんが！」

二階から金田が下りて来て、

金田「岡田、二階に上がりや」

吾一「カネさん、かまんかつたら秀さんを上  
がらしちゃつてくれんかね？」

金田「おまん、今日は一回も上がってないや  
ろう」

吾一「源三さんの胸、秀さんに見せちゃりた  
いき」

秀次「ホンマ！？あの人の胸を見せてくれる  
が？」

笑顔で頷く吾一。

金田「アホか、勝手にせえ！」

秀次「吾一さん、おおきに！」

と、二階に上がっていく秀次。

金田、吾一を睨み、

金田「ワシはちつくと休むき、ここはおまん  
一人でやりや！」

言い捨てて行ってしまおう金田。

吾一、笑顔で靴を整理する。

鏡川の畔のベンチ（日替り）

吾一が来ると、源三がタバコを燻らせている。

吾一「お待たせしました」

源三、吾一を見迎えて、

源三「呼び出したりして、すまんのう。まあ座りや」

吾一「（向かいのベンチに座り）いえ、ワシもきちんとご挨拶したい、

思うちよりましたき」

源三「挨拶なんぞどうでもええ。吾一ちゃん、ワシやおまんに会うたらどうしても聞きた

かったことがあってのう」

吾一「ワシに？何でするのう？」

源三「松山の大会（おおかい）のとき、ワシの胸を吾一ちゃんが飛ばした（潰した）ときのことよ」

松山旅館・二階（回想・夜）

源三が胴を引いている。

その正面で吾一が張っている。

合力の声「さあ出来ました。勝負！」

源三、右から三番目の五の目札を掴み

右の端に置く。

カミシタを静かに開ける。

五の札が一番上にある。

合力の声「ハイ！五で受けてください！」

吾一の五の札が大で開く。

場内がざわめく……。

元の鏡川の畔のベンチ

鏡川の畔のベンチで向き合う源三と吾一。

源三「ワシの中目（なかもく）の三間（さんげん）で、おまんの大（だい）が開いた勝負やった。ワシや今でもはつきり覚えちゆうぜよ。奥から四、三、ピン（一）、五、二、六やった」

吾一、苦笑して、

吾一「よ才覚えてますねえ」

源三「これでも胴師のはしくれやきのう。何  
でや、何で三間（右から三番目の目札）の  
五で大を開けたがぜよ!?」

吾一「勘ですき」

源三「いや、違う！あれは勘やない。

ちゃんと読んじよった」

吾一「顔を伏せて）もう堪えてください……」  
と、吾一。

源三、真顔で、

源三「おまん、奥、口（左端・右端から順番  
に）

で、きつちり張る本引きやったきのう、中  
目で勝負賭けたがはワシのキズ（癖）を見  
つけたがやないかえ？」

吾一、首を振り

吾一「（自分は）そんなに上手に遊べるような  
器じゃないですき」

源三「……」

吾一「……ほんま言うと、いっつも、下(角)から札をまく(並べる)に、あの時だけ上(大)からまいた(並べた)がですき。

ほんで、(角)に置いたつもり(三間の五が大(配当の一番大きい)におった)がです。ケツの四から張ったがですき！」

源三「ワシを立ててくれて、上手な嘘をいいゆうがかよ？」

吾一「いいえ！」と首を振り真剣な顔で「吾一「あの間違いのあとは、中目(なかもく)に気ができてしもうて、負け勝負ばかりになっただがです」

源三「……そうかね、終いの方はテレコ(あつちこつち)で張りよったがは知っちゆうけんど」

川の流れをじっと眺める源蔵と吾一。

源三「もう、本引きはやめたかね？」

吾一「ええ、やりません。けんど……」  
しばらく黙る吾一。

源三「けんど、なんぜよ？」

吾一「(恥ずかし気に)もし、自分がもういっぺん昔のような商売ができるようになったら……死ぬ前に、いつぺっただけ、前から思いきり張りたいたいです！」

源三「ほお、ええのう！」

吾一「そんなときは、源三さんに胸にまわってもらいたいです」

源三「そうよ！負けたまんまじゃ、ワシも引き下がれんきのう」

笑う、源三と吾一。

源三「すっぱり足を洗うた人に、いらんこと言うて、すまなんだねえ。堪えてよ」

「ほんなら元気で！」と、一礼して去っていく源三。

吾一、その後姿をいつまでも見送る。

### 九反田の賭場・一階廊下

帰ってきた吾一を酒井が呼び止める。

酒井「岡田、ちよつと」

吾一、酒井について帳場に入る。

同・帳場

酒井の前に座る吾一。

酒井「さっき、港会の三島さんが見えてのう。」

荒木さん、お勤めやと」

吾一「お勤めゆうて……刑務所に入られるが  
ですか？」

酒井「陣内組と夏からもめちよつたがの責任  
を一人で取つたそうや」

吾一「……」

酒井「幹部会でみんなが止めたけんど、きか  
んかつたらしい」

吾一「荒木さん、長い懲役から帰つたばつか  
りでしょう？」

酒井「そうよ、けんど荒木さん、いったん言  
いでしたら絶対引かんきねや」

吾一「……」

酒井「荒木さん、幹部会の席で、ワシや、待  
つもんがおらんき、行つてくらあよ、じゃ  
と。三島さんがあきれて言いよつた」

吾一「荒木さんらしいですね」

酒井「未決におるのも短いやろいうて、三島さんは言いよった。面会行くなら早いほうがええぞ」

頷く吾一。

### 場外市場（翌朝）

肉や野菜を買う生き生きとした吾一。

x

x

x

魚屋の店頭で、真剣な表情で鰹を選ぶ吾一、いい型のものを指差し、

吾一「これ一本、もらおうか」

「はいよ！」と吾一を見た魚屋、アツ！となり、

魚屋「あれ！吾一ちゃんやんか！」

吾一「（笑顔になり）久しぶり」

魚屋「久しぶりもええとこやんか！元気にしちよったかね！また店やりゆうが？」

吾一「いや……」

と、後ろから「カスリコがこんな朝早う

に何しゆうがな！」の声。

吾一が振り向くと、そこに若い衆を引き連れた恰幅のいい男、割烹料理屋「土佐銀」の社長、鈴木清が立っている。

鈴木「九反田の盆は、客に鰹らあ出しゆうがかか？」

吾一「……」

鈴木（若い衆に）おまんらも知っちゆうろう。

この男が魚一の大將や」

吾一「……」

鈴木「（若い衆に）この男が博打で魚一をつぶしよったおかげで、うちの店が繁盛しゆうがぞ！みんなあ、この人に足向けて寝られんぜよ！」

鈴木、吾一に歩み寄り、

鈴木「来年の春に土佐銀の三号店を出そう思うちよる。どうや？うちへ来んかよ？」

吾一「鈴木さん、おおきに。けんど、もうワシの包丁は錆びてしもうちよるきに」

鈴木「（不機嫌に）ほんなら市場に用はないろ

う。早よう、いにや！」

吾一、奥歯を噛み締める。

### 高知県警・拘置所面会室

刑務官に伴われて入ってきた荒木、ニコツと笑って椅子に座る。

荒木「吾一ちゃん、元気かよ、ヨウ来てくれたのう」

机の向かい側に包みを抱えた吾一。

吾一「荒木さん……」

荒木「後見人がムシヨ入りじゃ、パツとせん  
のう」

不安げな吾一の表情を見て、

荒木「そんな顔しなや。男にそんな顔されても、ひとつも嬉しゅうないわ（と笑う）」

荒木「それでちつと銭は貯まりゆうかよ？」

吾一「はい、お蔭さまでもうちよつとで、暇  
もらえますき」

荒木「そうかえ、よう頑張ったのう……一日  
でも早うに嫁さんと子供を迎えにいっちゃ

りよ  
」

吾一「(涙を拭き)おおきに！有難うございま  
す」

荒木、吾一の顔をじっと見て

荒木「吾一ちゃん、ちよつと、顔色悪いぜよ」

吾一「ここんどこ、ちよつと忙しかったがで  
す」

荒木「そうかよ、体壊したら、なんちゃあに  
ならんきのう、用心しいよ」

吾一「はい、荒木さんも体に気いつけて早う  
に戻ってきてください」

荒木「おおきに、戻ったら一番におまんの店  
に行くきのう」

吾一、「えっ」と荒木を見る。

荒木「ええのう。吾一ちゃん」

刑務官、荒木にそろそろ、時間だと合図。

頷き立ち上がる荒木。それを見て吾一、  
持ってきた風呂敷包を差し出す。

吾一「荒木さん、夜はこの弁当を食べてくだ

さい、お願いします」

荒木「おまんが作ってきてくれたがかよ」

吾一「ハイ！」

荒木「おおきに！高知一の板場の弁当か、今晚の飯がたのしみじゃ！」

吾一「(嬉しく)……」

荒木、刑務官と共に奥に消えていく。

高知市街・不動産屋・表(日替り)

不動産屋の表に貼り出された物件を見る  
吾一。

九反田のアパート・吾一と秀次の部屋

吾一の前にパンパンに膨らんだ靴下が五つ並んでいる。

その靴下からお金を出して数える吾一。

x  
手紙を書く吾一。

x  
吾一「……」

土佐清水・足摺食堂・店内（日替わり）

幸江が読む手紙を娘の佳代が聞いている。

幸江「（手紙を読んで）幸江と佳代が我慢をして頑張ってくれているおかげで、やっとお金が貯まりました。春までには、新しい店を始めたいと思って準備をしています。もう少しだけ待っていてください」

笑顔見合わせ、手を取り合う幸江と佳代。

佳代「おかあちゃん、良かったねえ！」

頷いて、指で涙を拭う幸江。

奥から「幸江ちゃん、八百屋で大根と生

姜買ってきて！」の声。

「はい！」の幸江に、

佳代「うちが行ってくるき、おかあちゃん

もう一回手紙読んじやり！」

佳代、奥へ行き、買い物かごと財布を受け取ると、幸江に手を振り、元気に店を飛び出していく。

笑顔で見送った幸江、手紙を拝むような仕草をし、また最初から読み直す。

幸江「（喜びに輝いて）……」

### 中新町不動産・店内

社長の澤と吾一が店舗の貸し物件を検討している。

澤「こつちのほうが場所はええけど、ちつくと狭いとちがう？」

吾一「狭もうてええがです。女房とイチからやり直すがやき」

澤「そうか！ええのう、吾一ちゃん！また繁盛するぜよ！」

吾一「（嬉しく）おおきに！」

澤「カスリコじゃいうてワヤにされよったけど、よう頑張ったのう。人間、覚悟決めて生きりや、やり直せるもんやのう。ワシや吾一ちゃんに教えてもろうたぜよ」

吾一「そんな、たいそうな……」

と照れる吾一をニコニコ見ていた澤、ふと表情を曇らせ、

澤「吾一ちゃんのようなのもおれば、困っ

たもんもおるで！」

吾一「？」となり、

吾一「何かあつたがですか？」

澤「いや、金田のことよ」

吾一「カネさん？」

澤「カネの阿呆が、金貸してくれゆうて……

おまんくの客のみんなあが困つちゆう」

吾一「みんなあて、あちこちでそんなことや

つちゆうがですか？」

澤「そろそろ、ぼんぼりの耳にも入るやろ」

吾一「……」

### 金田の家・表

吾一が玄関の戸に向かって声をかける。

吾一「カネさん、おるかね！カネさん！」

と、中から「開いちよりますき」とか細かい声。

### 同・室内

「失礼します」と入ってきた吾一、見て

ハツとなる。

粗末な室内に敷かれた布団に横たわった  
まま、吾一に顔を向ける金田の母・安子。

安子「すみません、光男は留守にしちよりま  
すき。何か？」

吾一「いえ……」

安子「……もしかして、岡田さんやるか？」

吾一「はい」

安子「いつも光男がお世話になって……こん  
な格好でごめんなさいね」

吾一「気にせんでください。ほんなら、これ  
で失礼しますき」

と、頭を下げ、出て行こうとする吾一に、  
安子「光男と仲ようしてやってね」

と、布団から出て部屋の隅に行く。下か  
ら何かを取り出し、古新聞に包んで吾一  
の手に渡す。

安子「朝鮮漬けやけど……」

吾一「(包を見て)はい」

安子「光男が大好きで、本場の味がするいう

て。よかつたら食べてちようだいね」  
吾一「おおきに、ありがとうございます」

### 九反田の賭場・表

掃き掃除をしながら、チラチラと辺りを伺っている吾一、「アッ」となり箒を投げ出す。やって来る金田に駆け寄り、その腕を引つ張つて賭場と反対方向へ連れていく吾一。

金田「なんや、何するんじゃ、こら！」

### 鏡川河川敷

向き合つて立つ吾一と金田。

金田「なんじゃ、こんなとこまで引つ張つてきよつて」

吾一、金田を見据え、

吾一「カネさん、うちのお客さんに金貸してくれゆうて頼んで回つちゆうがですか？」

金田「……おまんに関係ないろう」

吾一「酒井さんの耳に入つたら大ごとぞね」

金田「……放り出されるんやったら、それでもかまん」

吾一「カネさん！」

金田「ワシがおらんだったら、おまんのカスリも増えらあよ！」

カツとなつて金田の襟首を掴む吾一。

と、「カネさーん！」の秀次の声。

見る金田と吾一。

秀次、二人のもとへ駆け込んできて、

秀次「カネさん、探したぞね！」

金田「(秀次に)おんしゃまで、なんじゃ！」

秀次「おふくろさんが救急車で運ばれたゆうて、カネさんの近所の人が出来よつた！」

「！」となる金田、吾一と秀次を押し退け、走り去る。

不安に見送る吾一と秀次。

### 救急病院・廊下(夜)

長椅子に座つて頭垂れている金田。

その前に医師が立つ。

医師「金田さん」

金田、顔を上げて医師を見る。

医師「なんでこんなになるまで放っておいたんですか」

金田「オモニ……おふくろは？」

医師「容体は安定しましたが、長期の入院治療が必要です」

金田「……」

### 九反田のアパート・吾一と秀次の部屋

(夜)

鼾かいて寝ている秀次。

吾一は眠れず、寝返りを打つ。

吾一「……」

x

外が明るくなり始めても眠れない吾一。

x

x

そつと蒲団を抜け出す。

### 同・表(夜明け)

風呂敷包みを持った吾一が出てきて、歩

き去る。

### 金田の家・表

憔悴した金田が帰ってくる。

玄関の戸の間に風呂敷包みが挟んである。

金田「(風呂敷包みを見て)？」

物かげからそっと立ち去る吾一。

### 同・室内

風呂敷包みを開けた金田、「！」となる。

包みの中に、一万円札が何十枚が入っている。

金田「(涙が溢れて)……」

お金を抱きしめ、嗚咽する金田。

### 中新町不動産

澤に頭下げる吾一。

吾一「ほんまにすみません」

澤「いや、まだ契約したわけでもないし、こ

っちはかまんけんど、ええ物件やったき

ちつくともつたないのう」

吾一「……」

澤「なんか急に金がいったがかえ？」

吾一「ええ、ちよつと……半年ばあしたら又

お願いします」

澤「ま、物件はこれからもあるき。ええのが

あつたら、また声かけちやる」

吾一「よろしゅう頼みます」

### 九反田橋の上

欄干から鏡川の流れを見やる吾一。

吾一「……ワシのせいで、カネさんのカスリ  
が減ったがやき、仕方ないのう」

### 九反田の賭場・二階（日替わり）

吾一と秀次が張り札を張り替えている。

そこへ酒井が来て、

酒井「岡田、お客さんや」

「えつ」と酒井を見る吾一。

### 同・玄関

来た吾一、客を見て「！」となる。

吾一「おまん……」

リーゼントの金融業者・五味がニッコリと笑う。

五味「ご無沙汰やねえ」

### 喫茶店・店内

以前、コバケンに五味を紹介された喫茶店で向かい合う吾一と五味。

吾一「ワシ、誰にも名前貸しちよらんですき」

五味、笑った後、真顔になり、

五味「コバケンさんは可哀相なことしました」

吾一「……」

五味「あれから十一（といち）貸しはやめて

堅気のローン会社に就職したんですわ」

名刺を差し出す五味。

五味「今は中小企業さんが得意先ですわ。これでも皆さんに重宝がられちよりますき」

吾一、怪訝に名刺を見ながら、

吾一「ワシに何の用ですか？」

五味「荒木さんに頼まれました」

吾一「？」

五味「岡田さんに融資してくれゆうて」

吾一「！」

五味「三島さんから昨日、連絡があつてね」

吾一「融資、つて……」

五味「魚一の開業資金ですわ。荒木さんの頼みやき利は取りとうないがですけれど、自分も仕事ですき……、一番低い金利はもらいます」

吾一「……けんど、なんでワシにお金を？」

五味「早うに家族を呼び戻せるようにしちゃりたい、いうて三島さんに伝えたらいいです」

吾一「……（涙）」

五味「荒木さんが保証人なるゆうたら、犬にでも貸しますわ」

と、笑う五味。

吾一「なんか夢みたいやねえ……（涙）」

五味「ひとつだけ、条件があります。健康診

断受けてきてください」

吾一「健康診断？」

五味「形ばかりですけれど、会社の審査があるがです。そこら辺の医者でええですき」

吾一「そうかね、ほんなら明日、行ってきますき。けんど、まだ、信じられん……」

五味「人生、たまにはええこともありますわ」

吾一、パンツと立ち上がり、

吾一「おおきに！おおきに！」

周りの客が何事かと見る中、五味の手を取り、「おおきに！ありがとう！」と叫ぶ

吾一。

### 街路

小躍りするように駆ける吾一。

### 中新町不動産・表

吾一が来て、勢い良く店内に駆け込む。

店内から「澤さん、やりますき！ワシやっぱりやりますき！」と吾一の大きな声。

松野医院・外觀（日替り）

かつて荒木に運び込まれた小さな町医者。

同・診察室

老医師・松野の前に吾一。

松野、カルテを見ながら、

松野「腹ペコでぶっ倒れて、荒木に担ぎこまれてから、もう何年になるんかのう」

吾一「その節はお世話になりました」

松野「（頬笑み）飯はちゃんと食べゆうかね」

吾一「はい、ちゃんと食うちよります」

松野、吾一を見て、

松野「検査のほうやけんどのう、念のために大きな病院で診てもらいや、紹介状書くき」

吾一「えっ、ここだけじゃいかんがですか？」

紹介状を書き始める松野、

松野「ええから行ってこい！」

と、吾一を真っ直ぐ見て、

松野「医大ぜよ！」

### 大学病院・レントゲン室

吾一が高性能のレントゲン写真を撮られている。

### 同・患者の待合ロビー

大学病院の広い待合ロビー。  
大勢の患者が沈鬱な様子で順番を待っている。

吾一も、少し不安な面持ちになる。

### 同・診察室

若い医師の前に座っている吾一。

若い医師「岡田さん、検査の結果が出ました」

吾一「（機嫌よく）はい」

若い医師「臍臓に腫瘍があります。急いで手術が必要です」

ポカンとする吾一。

吾一「えっ？」

若い医師「ご家族に連絡をして、すぐ入院し

てください」

吾一、血の気が失せる。

吾一「……ワシ、癌なんですか？」

若い医師「まだ、わかりません」

吾一「死ぬるんですか？」

若い医師、吾一を見て、

若い医師「大丈夫です。今、死なないように手術をするんです」

吾一「……」

若い医師「(カルテを見て)診断書が必要なんですね？」

吾一「……いりません」

えっ、と吾一を見る若い医師。

吾一「……癌の男に金貸すアホはおりませんき」

### 神社(夕)

荒木に助けられた神社。

吾一がとぼとぼとやって来る。

本殿の前に佇み、

吾一「語りかけるように」うまいこといかな  
ねえ」

苦笑いの吾一、ツーツと涙が落ちる。

吾一「荒木さん、すみません。ワシの料理、  
もう食べてもらえんがです。……いろいろ  
助けてもろうたに、何の恩返しもできんと。  
……ほんまにすみません」  
手を合わせて、首を垂れる吾一。

### 九反田の賭場・帳場（夜）

盆がお開きになった後の帳場で、両膝つ  
いて酒井に頭を下げている吾一。

酒井「今日でここを辞めるゆうんか？」

吾一、顔を上げて、

吾一「ほんまにお世話になりました」

酒井「このこと、荒木さんは？」

吾一「きちんと、手紙でお伝えします」

酒井「……辞めてどうするがな？」

吾一「土佐清水の女房と子どもに会いに行き  
ます」

酒井「……………」

酒井、文机から封筒を取り出し、手金庫の中の金を数十万円入れる。

酒井「辞めな、ゆう気はない。荒木さんもそうやと思う」

金の入った封筒を吾一の前に置く酒井。

酒井「カネのことは聞いちゆう。気がつかんかったワシの落ち度や。おんしゃにすまんことした！」

吾一「あ、いえ……………」

酒井「カネのおふくろさんはきちんと入院しちゆうき、安心しいや」

頷く吾一。

酒井「これはワシからの餞別や」

吾一「おやじさん……………」

酒井「もう二度と賭場に足を踏み入れたらいかんぞ。…………と、ワシが言うのもヘンよのう」

と笑う。

吾一、もう一度、深く頭を下げる。

九反田のアパート・吾一と秀次の部屋（翌日）

荷物をバッグひとつに詰め終える吾一。

秀次が淋しそうに見ている。

秀次「旅に出る、旅に出るゆうても、自分はずうつと行けんかったに、吾一さんはスツと行ってしまいゆう」

吾一「秀さんはまだ若いき、焦ることはないがよ。ちゃんと修行して、ええ胴師になりよ！」

秀次「吾一さんがおらんようになったらつまらんが」

吾一、苦笑して、バッグを持ち、

吾一「ほんなら秀さん、お世話になりました」  
頭を下げ、部屋を出て行く吾一に、

秀次「吾一さん」

吾一、秀次を見る。

秀次「ゆうべ留さんが、梅ヶ辻のいろは旅館

でやりゆう大会（おおかい）で源三さんを見かけたゆうて、はなしよった。今日もやりゆうはずやき。土佐清水へ行く前に挨拶していったら？」

吾一「そうかね、ほんなら、そうしようかね」と、行こうとする吾一に、また、

秀次「吾一さん」

吾一「（振り向いて）なに？」

秀次「……なんちゃあない！」

吾一、ニッコリ笑って、部屋を出て行く。

秀次「……」

怒った顔で座り込み、涙を腕でゴシゴシと拭う。

### 梅ヶ辻・いろは旅館・表（夜）

吾一が来ると、玄関番の男が「お越し！」と声をかける。

吾一「源三さん、おられますか？ちつくと挨拶したいがですけんど」

玄関番「源三さんやったら、さっき出られま

したき、じきに帰るがやないですか。入ってお待ちになったらどうですらう」

吾一「かまんですか？」

玄関番「源三さんのお知り合いやったら、どうぞ」

「ほんなら」と入っていく吾一。

### 同・二階広間（夜）

五十人ほどで手本引きの真剣勝負を展開している。

合力も二人に加え、助合力が二人の計四人。

勝負に入ると、静寂と緊張感が盆を包む。部屋の隅に座った吾一、その光景に目を細める。

勝負が切れたところで、張り子の中いた土佐銀の鈴木が声を上げる。

鈴木「ほお！九反田のカスリコが張りに来ちゆう！入れちゃりや！」

皆が吾一を見る。

吾一「(困惑して)……………」

鈴木「さあ！あの男の張りはキツイきのう！

見ものぜよ！」

吾一「(下を向いて耐えて)……………」

吾一、痛いほど拳を握りしめる。

鈴木「何しゆう！早ようせんか！……………銭がな  
かつたらいなや！」

吾一「……………」

吾一、軽く頭を下げると、末席に連なる。

合力Aから「どうぞ！」と吾一の前に  
張り札が投げられる。

吾一「(張り札を見つめ)……………」

合力二人、助合力二人がそれぞれ張り子  
に「張ってください！」と声をかける。  
張り子の札の擦れる音が「パチパチ」と  
リズムよく響く。

吾一、バッグの中の封筒から五十万を出  
して座っている座布団の下に置く。

鈴木、吾一を見て、

鈴木「ちつとばあの銭で喰い付く気かよ！」

合力A「（鈴木を見て）すみません、ちょっと静かに願います」

「さあピンに直して入ろう！」と合力の掛け声。

松山の胴師、ピン（一）の札を張り子に見せながら被りの浴衣の中で札を繰り、カミシタ（二つ折りの布）に包み、自分の膝の前に静かに置く。

その一連の動作を息を飲むように張り子たちは見つめている。

合力A「さあ、はいりました！どんなこと？

サクサク張ってやってください！」

合力B「さあ、どうですか！胴も生きてまっ

せ！どんどん、張ってください！」

助合力、二人も、「張ってください！」「どうですか？」と掛け声。

吾一、六枚の張り札から四枚を抜き角（二分負け）、止まり（二分勝ち）、中（六分勝ち）、大（十二分勝ち）と順番に置く。その右横（やす張り）に十万円。

吾一「(無表情に)……………」

合力A「さあ、こちら出来ました！そちら、  
どうかな？」

合力B「はい！こちらも出来ました！さあ、  
手を切つて！」

合力A「ええかな？えいな！はい！勝負！」

松山の胴師、前に並んだ一から六までの  
目札の中から右端から二つ目の五の目札  
に手をかけて右端に並べる。

合力A、Bが「はい！小戻りの五！は  
い！五で受けてください！」ない人は札  
を引いてください！」と抜けた張り子の  
金を集める。

鈴木の前からも札束が取り上げられる。

鈴木「(悔しく)！」

合力A「(胴師に向かって)さあ、札をなお  
して！入ろう！」

松山の胴師、札を五からピン(一)に直  
して、浴衣の後ろで札を繰り出す。

出す札を一番上に置き、カミシタに入れ

て自分の前の盆ごぎに静かに置く。

張り子たちはシーンとなつた空気がら一  
転、札をパチパチ鳴らしながら胴師の表  
情を舐めまわすように見る。

合力、助合力は五で受かつた張り子たち  
にそれぞれの金を払う。

吾一、張つていた十万が大（配当が一番  
良い）で受けて十二万になる。

「ええ、受け！」と助合力から金が投げ  
られる。

吾一を睨みつける鈴木。

合力A「さあ、どんなこと？張つちやつてく  
ださい！」

合力B「さあ、合しちやつてよ！早いとこ、  
出来てます！」

張り子a「よう、生きちゆうのう！この綱で  
洗うがやないかえ？」

と胴師の表情を伺う。

吾一、表情を変えず、札四枚を丁寧に並  
べる。

座布団に敷かれている金の中から二十万を無造作に張る。

合力A「はい！こちら出来ました！そちら、  
どうかな？」

合力B「はい、手をきってちょうだい！はい！こちらも、でけた！」

合力A「よろしいな！？はい！勝負！」

松山の胴師、背筋を伸ばして六個並んだ目札から、左端の二を掴み右端に置く。

合力A「はい！ケツの二！二です！ない方は札を引いてください！」

合力B「はい！捲りの二！二で受けて！ない人は札をさげて！」

合力四人、抜けた張り子の金を集める。  
またしても抜ける鈴木。

松山の胴師「つけてみて……（ちらっと、吾一の張り札を見る）」

吾一、またも大で受かる。

二十四万が「ええ受け！」と合力から投げられる。

松山の胴師「皆さん、悪いことしました。洗わしてもらいます！」

松山の胴師、座を立ちながら吾一の顔を見て首を傾げる。

鈴木、顔を真っ赤にして立ち上がる。

鈴木「おい！カスリコが張るような盆はゲンが悪いき！おまん、いねや！」

と、吾一に怒鳴る。

張り子b「カスリコ、カスリコゆうけんど、盆中で張りゆうもんにカスリコも大臣もないぞね」

鈴木「なにッ！」

張り子c「おまんこそ、うるさいき帰りや！太いこと言いよつたら借金で、店、売るようになるぜよ！」

「魚一と博打も料理も勝負出来るわけないだろうがや！」と他の張り子の声。

鈴木「なんやと！誰な！？言うたがは！」

と張り札を叩きつけ、席を立つ。

張り子たちから失笑が漏れる。

吾一「（無表情のまま）……………」

### 同・二階廊下（夜）

松山の胴師と源三が行き会う。

源三「どうやった？」

松山の胴師「ええ、なかなか手強いお人が…

…」

源三「ほお」

松山の胴師「あの人……岡田吾一やないろう  
かのう」

「！」となる源三。

### 同・元の二階広間（夜）

高松の胴師が胴金の二百万を無造作に自  
分の前に投げる。

その金を二人の合力が十万束にして、そ  
れぞれの前に並べる。

合力A「はい！乗りの方はおりませんか？」  
と張り子に聞く。

「一つ（二十万）乗せといて！」「二つ（四

十万)乗せちよいてや!」と乗り手の声。

高松の胴師に乗り手の数を知らせ、

合力A「……さあ入ろう!」

盆中、シーンとなる。

高松の胴師、懐で親札を繰り終わると、札の入ったカミシタを自分の前に置き、正面をまっすぐ見て微動だにしない。

張り子の札を擦る音が部屋の中にパチパチと響く。

吾一、六枚の札から四枚を(普通の張り方)出して丁寧に張る。

合力B「さあどんなこと?早いとこ出来てます!合わしちやっってください!」

助合力二人も張り子に「どうですか?よろしかったら手を切ってください!」と声をかけ促す。

合力A「さあこちら出来た!揃いました!」

合力B「はい!こちらも出来た!ええな!はい!勝負!」

高松の胴師、ゆっくりとカミシタに手を

かけて開ける。

六の札が一番上に見える。

合力A「はい！初綱（最初）は六！六で受けてください！ない人は札を下げて！」

抜けた金をかき集める合力たち。

合力B「ピン（一）に直して！さあ入ろう！」

高松の胴師、札を一に直して被っている浴衣の奥で札を繰り、カミシタに入れ静かに前の盆ござに置く。緊張した空気が盆中を覆う。

合力、助合力が先ほどの六で受けた張り子に素早く金をつける。

助合力A「はい！ええ受け！」

と、吾一の前に受け金の二十四万をつける。

吾一、張り金の二十万と一緒に引き、無造作に座布団の下に置く。

合力それぞれが、張り子に「張ってください！」と促す。

そして「勝負！」と声をかける。

胴師が前にある六個の木札を表に向けて  
適当に並べ初綱の六を右端に置く。

次にゆつくりと三の目札を右端に持つて  
きてカミシタを開ける。

合力A「はい！三！三で受けてください！な  
い人は札、下げて！」

抜けた者の金を集め終わり、合力はまた  
同じリズムで胴師に声をかける。

胴師、同じ様に札を後ろ手で繰り前の盆  
ござに置く。

合力四人は素早く受かった者に金をつけ  
る。

助合力A、半ば呆れたような顔つきで、  
助合力A「はい！よう受け！」

と、吾一に六十万を投げる。

吾一、相変わらず無表情で張り金の五十  
万と合わせて座布団の下に置く。

他の張り子から感嘆の声。

× × ×  
戸口からその様子をジッと見ている源三。

高松の胴師、ちらつと吾一の方を見る。  
合力の勝負の声のたび、吾一の張った札  
が大、中（一番と二番目に配当の良い）  
で受かる。

百万の金を無造作に張る吾一。  
胴金（二百万）はすでに、二つ前（追加  
した）の四百万。

合力「勝負！」の声。  
胴師、左の端の五の目札を右端に並べる。  
合力A「五！捲りの五で受けてください！」

吾一の札の大きが開く。  
百二十万の受け。  
それぞれの当たり札が開く。

合力が胴師に聞く。  
合力A「どうします？もう、一丁いきます  
か？」

高松の胴師「いや……全部つけてみて」  
合力四人で受かった者に金をつける。  
胴の前に残ったのは十万足らず。

高松の胴師「乗り手の皆さん、悪いことしました……もう、どないもありません！」

と言つて自分の前の六個の目札を畳み、「ふうっ」と立ち上がる。

吾一の方を確かめるように見て、下がつていく高松の胴師。

吾一、相変わらず無表情で、座布団の下に膨れ上がる札束を整理している。

と、張り子たちが一方を一斉に見る。

入つてきた源三が胴の座に座る。

吾一「(源三を見ず)……」

源三「(も、吾一を見ず)……」

胴金二百万を静かに置く源三。

それを左右四人の合力が十万束にして均等に素早く分けて置く。

源三、合力のかけ声で、懐に手を入れて六枚の親札を繰り、カミシタに包み自分の前に静かに置く。

吾一、源三、お互いをまったく見ない。

合力と助合力、「さあ張ってください！」

「早いとこ出来てます！」と小気味の良  
い声。

合力 A 「出来ました！よろしいな！はい！勝  
負！」

源三ゆっくりと前に置いてあるカミシタ  
を開ける。

合力 A 「はい！四！初綱は四で受けてくださ  
い！」

合力 B 「（抜けた金を集めながら）ない方は  
札を引いてください！」

源三、札をピン（ー）に直して懐に手を入  
れ、札を繰り、同じリズムでカミシタ  
を前に置く。

そして、受かった札の方をちらっと見る。

吾一は抜けている。

合力、手際よく受かったところに金をつ  
ける。

そして、また、「張ってください！」の声。

吾一、相変わらず無表情に札を張る。

賭け金を増やすが、相変わらず（四枚の

札のヤス張り。

その右上の横に五十万置く。

合力の「勝負！」の声。

源三、前に畳んである目札を丁寧に表を向けて並べる。

初綱の四を右端に置き、三の目札を四の目札の右に置く。

「はい！三！三で受けてください！」ない人は札を引いて！」と合力。

吾一も札を引き、張り金の五十万も合力の手で奪われる。

「さあ入ろう！」合力の声。

合力、受かった者に金をつけ終わる。

「さあ、張ってください！」「早いところ出てます！」などのかけ声。

吾一、無造作に二百万を張り札の右横に置く。

他の張り子たちから「ほう！ええ張りするのう！」「あらあ誰ぜよ？」の声がする。

合力 A 「さあ！こちら出来た！」

合力 B 「はい！出来たら手をきって！よろしいな？」

合力 A 「はい！出来た！勝負！」

源三、背筋を伸ばし、カミシタに手を置き、開ける。

合力 A 「はい！三！三のネ！」

「ない方は札を引いて！」と合力 B。

張り子も合力も吾一の方を見る。

吾一、静かに大を開ける。

部屋中に、何とも言えないどよめきが響く。

源三、何事もなかったかのように、合力のかけ声で札をピン（一）に直して入る。

そしてゆつくりと前にカミシタを置く。

合力受かった者に金をつける。

吾一に二百四十万が投げられる。

「ええ受け！」と合力。

吾一、同じように三百万を張る。

合力四人、「さあ張って！」と張り子に声をかける。

札が出揃い、

合力A「はい！出来た！勝負！」

源三、同じリズムでカミシタを開ける。

合力A「はい！三！三のネで受けて！」

「ない方は札を引いてください！」の合力たち。

吾一、静かに札を引く。

座がざわめく。

x x x

(モニタージユで)

吾一と源三、受かったり抜けたりの勝負が続く。

が、勝負のたび、段々と胴側の金が増えていく。

x x x

張り子b「いかん！全然、合わん！」

張り子c「ふたありのサシになったのう」

源三、懐からカミシタを出し静かに前に置く。

それを見た合力四人、「さあ張って！」の

声。

吾一、他の張り子よりも早く札を並べる。

張り札の右横に残った五百万を無造作に置く。

盆中、それを見て騒めく。

「岡田吾一の張りを久しぶりに見たのう」「ええもん見たのう」と張り子たちの声。

合力A「出来ましたかな！」

合力B「急いじゃって！高いところ出来ちゆう！ええかな？ええな！はい！勝負！」

源三、左端の二の目札を掴み、右端に置く。

そして静かにカミシタに手をかけ開ける。

合力A「はい！二！捲りの二で受けてください！」

吾一「……」

吾一、静かに札を下げる。

自分の張り札の六枚を四、五回繰って輪ゴムで括り、座っていた座布団の上に乗

せる吾一。

源三に一礼して席を立つ。

源三、合力に清算の指示を出して、

源三「悪いことしました。上がらせてもらいます」

と、言つて立ち上がる。

同・表（夜）

急いで出てくる源三。

辺りを見回すが、吾一の姿はない。

源三「……」

夜の街路

吾一が来て、立ち止まる。

街路灯の下に、崩れるように座り込む。

吾一「……（ため息）」

と、見ると、目の前に、あの日、神社で見た、幻想の紙芝居屋が立っている。

吾一「……あんときの紙芝居屋やないか」  
紙芝居屋、哀れむように、

紙芝居屋「なんでまた、博打に手エ出したんや」

吾一「なんじゃろのう……」

紙芝居屋「土佐銀の鈴木に馬鹿にされよった  
きか？……（やつれた吾一の顔を覗き）女  
房や子どもに、もつといっぱい金を残しち  
やりたいと思うたんか？」

吾一「……わからん。けれど、ひさしぶりに  
張り子の座布団に座りよつたら……何とも  
言えん、ええ気持ちになつたがよ」

紙芝居屋「あんなに勝つちよつたに、なんで  
途中でやめんかつた？ええ気持ちに酔うち  
よつたがかや！？」

吾一「勝つちゆう時に場を立てるんやつたら  
苦労はせんき」

と苦笑する吾一。

紙芝居屋「あほな男よのう」

吾一「ほんまにのう。……けんど、もう思い  
残すことはないぜよ。源三さんと思ひ切り  
勝負できたき！」

紙芝居屋「……」

吾一「ワシの紙芝居の続き、つくるのか？」

紙芝居屋「……そうやのう」『ある阿呆の一生』

なんてどうや？」

吾一「(笑って)どっかで聞いたことがあるよ  
うな題名やのう。最後は膀胱癌であるのせ  
ゆか。(思い出したように)ほんで、膀胱  
つて、腹の中のどこらへんにあるがよ？」

吾一と紙芝居屋、笑って、

紙芝居屋「こりや、『幸せもんの一生』やな」

吾一「……そうかもしれん」

と、目を閉じ、再び目を開けると、紙芝  
居屋の姿はない。

吾一「……ほんま、幸せもんや」

吾一、街路灯の下で、もう一度、目を閉  
じる。

土佐清水・田舎の火葬場

テロップ「昭和四十四年三月末」

満開の桜の木の向こうに火葬場の煙突。

白い煙が上がっている。

その煙を見上げている酒井、金田、秀次、  
そして源三。

秀次「……………吾一さん、煙になってしまつたね」

金田「（涙を拭き）ワシのおふくろに、命をく  
れたようなもんやき……………」

酒井「（金田に）もう言うなや！岡田らしい生  
き方やつたき。ねえ、御大」

源三「……………」

無言で煙を見つめる源三。

と、そこへ幸江と佳代が来る。

酒井たちに頭を下げる幸江と佳代。

幸江「本日は遠いところ、わざわざお出でい  
ただき、ありがとうございます。岡田の家  
内の幸江です。（佳代を見て）これは娘の佳  
代です。ご挨拶が遅れまして申し訳ありま  
せん」

酒井らも頭を下げ、

酒井「ワシらは、岡田さんの仕事仲間のもん  
です。岡田さんにお別れ言いにきただけで

すき、どうぞお気を遣われませんように」

佳代、泣き腫らした目で、酒井たちを見て、

佳代「おとうちゃん、どんなふうに通っていたんですか？」

酒井「真面目でね、お客さんたちにもたいそう好かれちよったよ」

秀次「ワシも吾一さんが好きやった！」  
と泣く。

金田「岡田さんはワシの恩人です。ワシや、絶対、ご恩を忘れませんき」

と泣く。

幸江「(涙を拭き)ありがとうございます。みなさんにそんなふうに通うてもろうて、岡田は幸せもんです」

源三、懐から分厚い封筒を取り出し、佳代に渡す。

「？」と見る佳代。

源三「(佳代に)ワシやお父さんから銭を借りちよったがよ。返すのが遅うなっしてしもう

て申し訳ない」

佳代、困って幸江を見る。

幸江「(源三に)私らの知らんことですき。それ  
は……」

源三「(幸江に)知るも知らんも、借りたもん  
は借りたもんやきのう」

酒井「(察して)奥さん、どうか受けてやって  
ちょうだい」

幸江、何かを感じ取り、

幸江「……はい、お言葉に甘えさせてもらい  
ます。有難うございます」

と、深々と源三に頭を下げる幸江と佳代。

二人の目に涙。

源三「ああ、よかった！ワシやこの歳で下手  
売るところやった！おおきに！おおきに！」

### 同・帰り道

酒井と源三、金田、秀次が歩いていく。

秀次「寺田さん、吾一さんに金借りちよった  
がですか？」

金田が何か言おうとするのを酒井が止める。

源三「ああ。借りたり貸したり。……吾一ちゃんも、借りっぱなしにせんと、きつちり返しに来てくれたきのう」

秀次「（無邪気に）ふーん」

風に乗って桜の花びらが舞う。

源三、酒井、金田、秀次、思わず立ち止まって空を見上げる。

### 九反田の賭場・二階（日替り・夜）

淵上、留さん、藤のママら常連が盆を囲んでいる。

酒井「次の胴、どなたかいきませんか？」

張り子たち、胴に回る気配がない。

酒井「……ほんなら」

酒井、お茶を配っている秀次に、

酒井「おい、秀！お客さんが退屈しゆうき、

一本引いちゃりや！」

「！」の秀次、

秀次「じ、自分がですか？」

酒井「ぶちつても（負けても）かまんき、い  
けや！」

盆中がワツと沸く。

「こりや見ものぜよ！」「いっちやれ、い  
つちやれ！」と張り子たち。

合力の政、ニヤツと、

合力の政「秀、ぼんぼりさんがせつかく言う  
てくれゆうに、早よう構えんかや！」

秀次、立ち上がり、自分の顔をパンツと  
叩き、

秀次「よつしゃあ！いくぜよ！」

片隅で、金田が微笑んでいる。

## 県道

夏空の下、三島の運転する車が走る。

テロップ「昭和四十七年八月」

## 車の中

荒木が窓外を眺めている。

土佐清水バス停駅・表

足摺食堂の場所を聞く三島。

足摺食堂・表

中を伺う荒木。

× × ×  
新しくなつた食堂で幸江と、女性らしく  
なつた佳代が、明るい笑顔で働いている。

× × ×  
荒木、一礼すると立ち去る。

山の上の寺

花を持った荒木が来る。

同・墓地

吾一の墓に花と線香を供え、額づいて手  
を合わす荒木。

荒木「……シヨウ、盆中の銭は、薄情やつた  
のう。堪えとうせ！吾一ちゃん」

荒木、立って墓地からの眺めを見やる。

眼下に輝く青い海が広がっている。

荒木「ええ眺めやのう、羨ましいぜよ」

と、一陣の風が、通り過ぎていく。

荒木「吾ーちゃん……」

微笑む荒木。

夏空を、風がどこまでも駆け上っていく。

終